

武蔵野日曜集会

真理とは何ぞや

――ヨハネ伝第18章12～38節――

1985年2月24日(武蔵野)

小池辰雄

イエスを捕え縛りて曳き往く^ひ ペテロまた否む^{すまじし} 過越^{すまじし} わが国はこの世のものならず 全存在
で神に回帰せよ 真理を与えるために来た 真理に属する者 真理とは何ぞ 我なり キリス
トの世界に化身していく 召団讃歌A40 「キリストは地に在りて」

【ヨハネ18・12～38】

¹² 爰^{こゝ}にかの兵隊・千卒長・ユダヤ人の下役ども、イエスを捕え、縛りて先
ずアンナスの許に曳き往く^ゆ、¹³ アンナスはその年の大祭司なるカヤパの舅^{しゅうと}
なり。¹⁴ カヤパはさきにユダヤ人に、一人、民のために死ぬるは益なる事を
勧めし者なり。¹⁵ シモン・ペテロ及び他の一人の弟子、イエスに従う。この
弟子は大祭司に知られたる者なれば、イエスと共に大祭司の庭に入りしが、
¹⁶ ペテロは門の外に立てり。ここに大祭司に知られたる彼の弟子いでて、門
を守る女に物言いてペテロを連れ入れしに¹⁷ 門を守る婢女^{はしため}、ペテロに言う『な
んじも彼の人の弟子の一人なるか』かれ言う『然らず』¹⁸ 時寒くして僕・下
役ども炭火を熾^{おこ}し、その傍らに立ちて煖まり居りしに、ペテロも共に立ちて
煖まりいたり。

¹⁹ ここに大祭司、イエスにその弟子とその教とにつきて問いたれば、²⁰ イ
エス答え給う『われ公然^{おおやけ}に世に語れり、凡てのユダヤ人の相集う会堂と宮と
にて常に教え、密^{ひそか}には何をも語りし事なし。²¹ 何ゆえに我に問うか、我が語
れることは聴きたる人々に問え。視よ、彼らは我が言いしことを知るなり』
²² 斯く言い給うとき傍らに立つ下役の一人、手掌^{てのひら}にてイエスを打ちて言う『か
くも大祭司に答うるか』²³ イエス答え給う『わが語りし言、もし悪^あしくば、
その悪しき故を証^{あかし}せよ。善くば何とて打つぞ』²⁴ 爰にアンナス、イエスを縛
りたるままにて、大祭司カヤパの許に送れり。

²⁵ シモン・ペテロ立ちて煖まり居たるに、人々いう『なんじも彼が弟子の
一人なるか』否^{いな}みて言う『然らず』²⁶ 大祭司の僕の一人にて、ペテロに耳を
斬り落されし者の親族なるが言う『われ汝が園にて彼と偕なるを見しなら
ずや』²⁷ ペテロまた否む折しも鶏鳴きぬ。



28 斯て人々イエスをカヤパの許より官邸にひきゆく、時は夜明なり。彼ら過越の食をなさんために、汚穢を受けじとて己らは官邸に入らず。29 爰にピラト彼らの前に出でゆきて言う『この人に対して如何なる訴訟をなすか』30 答えて言う『もし悪をなしたる者ならずば汝に付きじ』31 ピラト言う『なんじら彼を引取り、おのが律法に循いて審け』ユダヤ人いう『我らに人を殺す權威なし』32 これイエス己が如何なる死にて死ぬるかを示して言い給いし御言の成就せん為なり。

33 爰にピラトまた官邸に入り、イエスを呼び出して言う『なんじはユダヤ人の王なるか』34 イエス答え給う『これは汝おのれより言うか、將わが事を人の汝に告げたるか』35 ピラト答う『我はユダヤ人ならんや、汝の国人・祭司長ら汝を我に付したり、汝なにを為ししぞ』36 イエス答え給う『わが国はこの世のものならず、若し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付きじと戦いしならん。然れど我が国は此の世よりのものならず』37 爰にピラト言う『されば汝は王なるか』イエス答え給う『われの王たることは汝の言えるごとし。我は之がために生まれ、之がために世に来れり、即ち真理につきて証せん為なり。凡て真理に属する者は我が声をきく』38 ピラト言う『真理とは何ぞ』

● イエスを捕え縛りて曳き往く

12 爰にかの兵隊・千卒長・ユダヤ人の下役ども、もちろん、これはローマの兵隊です。

イエスを捕え、縛りて先ずアンナスの許に曳き往く、13 アンナスはその年の大祭司なるカヤパの舅なり。

アンナスはカヤパの前にも大祭司だった。

14 カヤパはさきにユダヤ人に、一人、民のために死ぬるは益なる事を勧めし者なり。15 シモン・ペテロ及び他の一人の弟子、

というのはヨハネ彼自身のこと。ヨハネはなかなか自分の名前を言わない。「愛される弟子」とか、ここでは「他の一人の弟子」と言っている。「私が」ということです。「ペテロと私がイエスに従う」と。

イエスに従う。この弟子は大祭司に知られたる者なれば、即ち、「私は大祭司に知られている者だ」と。

イエスと共に大祭司の庭に入りしが、だから、遠慮なく入って行った。

16 ペテロは門の外に立てり。



ペテロはよく知っていないものだから、多少、「先生はどうなるかな」と心配して来たんだけれども、門の外で、その先には入らない。

ここに大祭司に知られたる彼の弟子

即ち、「私が」、

いでて、門を守る女に物言いて

「私の親友だから入れてくれ」というわけでしょうね。

ペテロを連れ入れしに、¹⁷ 門を守る婢女、^{はしため} ペテロに言う『なんじも彼の人の

弟子の一人なるか』

「彼の人」というのは「イエス」のこと。「あなたもイエスの弟子の一人か」と。ペテロは、

かれ言う『然らず』

「そうではないよ」と。

¹⁸ 時寒くして僕・下役ども炭火を熾し、その傍らに立ちて^{あた}煖まり居りしに、

なにか情景が浮かんでくるようですね。

ペテロも共に立ちて煖まりいたり。

ペテロも一緒になって暖まっていた。

¹⁹ ここに大祭司、

これはアンナスのことです。

イエスにその弟子とその教につきて問いたれば、²⁰ イエス答え給う『われ

^{おおよけ}公然に世に語れり、

公然と語ってきたと。

凡てのユダヤ人の相集う会堂と宮

「会堂と宮」というのは、「シナゴグと神殿」ですね。

とにて常に教え、^{ひそか}密には何をも語りし事なし。

コソコソ言ったのではないと。

²¹ 何ゆえに我に問うか、

もう分かっていないではないかと。

我が語れることは聴きたる人々に問え。

もうまた言わないから、聴いた人に聞きなさいと。なかなか愉快だね、キリストの答えは。また、聴いた人も伝えてないとみえる。キリストの言はやつぱり、伝えなければいかん。今でも福音はどしどし遠慮なく伝えなくてはね。皆さんは伝道者ですから。

視よ、彼らは我が言いしことを知るなり』

私の言ったことはみんな知っているわけだと。

²² 斯く言い給うとき傍らに立つ下役の一人、^{てのひら}手掌にてイエスを打ちて言う

平手打ちした。



『かくも大祭司に答うるか』

この権威ある大祭司にと。権威といったつてこの世の権威だからね。キリストは神さまの権威だよ。こんな言い方があるかというわけなんだ。

²³ イエス答え給う『わが語りし言、もし悪しくば、その悪しき故を証せよ。

もし悪ければ、なぜ悪いか言ってみろと。

善くば何とて打つぞ』

いいなら、なぜ打ったりするかと。完全にキリストは権威をもって抑えてしまっている。イエスはもう十字架にかかることをはつきり分かつていらつしやるから、何も恐れるものはないわけです。

●ペテロまた否む

²⁴ 爰にアンナス、イエスを縛りたるままにて、大祭司カヤパの許に送れり。

今の新しくなった大祭司カヤパのところに送った。

²⁵ シモン・ペテロ立ちて^{あたた}煖まり居たるに、人々いう『なんじも彼が弟子の一

人なるか』

弟子の一人かと。

否みて言う『然らず』

これは二度目ですね。そうじゃないと。

²⁶ 大祭司の僕の一人にて、

ゲッセマネの園でキリストが捕まるときに、ローマの兵隊の一人――「マルコス」と名前まで出ていたね――を断ち切ろうと思つたけれども、ちよつと外れて耳を落とした。

ペテロに耳を斬り落されし者の親族なるが言う『われ汝が園

「園」とはゲッセマネの園です。「園」と言つても、オリーブの森みたいなものです。

にて彼と偕なるを見しならずや』²⁷ ペテロまた否む

これが三度目。

折しも鶏鳴きぬ。

キリストが預言されたとおり、

「鶏が鳴く前にお前は二度私を否むぞ」

と。おもしろいね、そういう言葉をペテロは忘れていたわけではなからうが、自然にそうなつてしまった。「三度否む」ということは、もう十回も二十回も否むということと同じことになる。完全な否定です。

そのかわり今度は、三度肯定すれば、これは完全な肯定になる。「三」というのはそういう完全数を表わす。「三位一体」とかいうように。この場合は悪いときの「三度」だ。

「三度否むぞ」と。キリストはむしろもうひとつ奥に、



「お前をして三度拒ましめるぞ。お前はそこで一応助かるぞ」

と。キリストはペテロを憐れんで、そして否ませた。本当はそうなんです。ペテロの弱さをキリストは知っているから。

「そのかわり今度は、聖霊が来たら、お前は私を証するぞ」

ということです。そのことはヨハネ伝の後の方へいくと、はっきりわかります。

● 過越^{すぎこし}

28 斯て人々イエスをカヤパの許より官邸にひきゆく、時は夜明なり。彼ら過越^{すぎこし}の食をなさんために、汚穢^{けがれ}を受けじとて己らは官邸に入らず。

「過越^{すぎこし}」というのをちよつとみましようね。出エジプト記の12章に詳しく出ている。

「1 エホバ、エジプトの国にてモーセとアロンに告げていたまいけるは、
2 此月^{この}を汝らの月の首^{あたま}となせ、汝ら是を年の正月となすべし。

即ち、これは「アビブ」とか「ニサン」の月という。今の太陽暦でいうと、3月、4月の頃です。これがイスラエルでは初めの月、1月になるわけです。「アビブ」という言葉で出てくるのが出エジプト記13章4節で、これはカナンの暦の言い方です。バビロニアの言い方になると、「ニサン」といって、ネヘミヤ記2章1節、エズラ書3章7節に出てます。

3 汝等イスラエルの全会衆に告げて言うべし。此月の十日に家の父たる者お
のおの羔羊^{こひつじ}を取るべし、⁴もし家族少くして其羔羊を尽くすことあたわずばその家の隣なる人とともに人の数にしたがいて之を取るべし。各人の食^{くら}う所に
したがいて汝等羔羊を計るべし。⁵汝らの羔羊は疵^{きず}なき当歳^{とうさい}の牡^{おす}なるべし。

そういう「疵^{きず}なき当歳^{とうさい}の牡^{おす}」ということは、キリストが羔といわれるのが正にそうなんです。キリストは罪のないひと、疵のないひと。「神の羔^{こひつじ}」というのは、キリストのことをそういうわけというわけです。「羔^{こひつじ}」という字は、火で焼くような羊は羔^{こひつじ}がおいしいから、それでこれが子羊という意味になる。おもしろいね、漢字というのは。漢字は世界最高の文字です。

汝等綿羊^{ひつじ}あるいは山羊^{やぎ}の中よりこれを取るべし。

羊がなければ山羊でもいいと。

6 而して此月の十四日まで之を守りおきイスラエルの会衆みな薄暮^{うすぐれ}に之を屠^{ほふ}り、

「薄暮^{うすぐれ}」というのは、「二つの夕暮れの間」という字なんです。夕方に、薄明から本当に暗くなる間、それを「薄暮^{うすぐれ}」という。「たそがれどき」というのは、「たそかれは」からきている。彼は誰だかよくはつきりわからないと。それが夕暮れだ。ひっくり返って、「かわたれどき」というのは、「かれはたれ」ということで、明け方のはつきりしない時、未明のころ。

7 その血をとりて其之を食う家の門口^{かどぐち}の両旁^{ふたがは}の柱と鴨居に塗るべし。⁸而して



此夜その肉を火に焼きて食い又酔いれぬ。パンに苦菜をそえて食うべし。

これがそうなんです。ヘブライ語ではこの祭のことを「パスツハ」というんですけれども、過越すぎこしの祭です。「パスオーバー」という英語とちよつと似ている。

……¹¹なんじらかく此を食うべし、即ち腰をひきからげ足に靴を穿き手に杖をとりて急ぎて之を食うべし、これエホバの過越すぎこし節なり。¹²是夜われエジプトの国を巡りて人と畜けものとを論いわずエジプトの国の中の長子ういごたる者を尽く撃ち殺し又エジプトの諸の神に罰をこうむらせん。我はエホバなり。¹³その血なんじらが居るところの家にありて汝等のために記号しるしとならん。我血を見る時なんじらを過越すぎこすべし又わがエジプトの国を撃つ時災なんじらに降りて滅ぼすことなるべし。¹⁴汝らは日を記念おほえてエホバの節期いはいびとなし世々これを祝うべし、汝等之を常例となして祝うべし。」(出エジプト12・1～14)

そういった血が塗つてあるところは、神さまが過ぎ越していく。エジプトの王様がイスラエルの民の長子をみんな殺してしまえと言ったときに、その過越の血の塗った所はもう贖いの印だから、これを神さまが通り過ぎるという、それで助けられたという故事からくるわけです。エジプトの長子は殺された。キリストの生まれるときは、その逆をやられたわけです。

それから15節から20節までは、「除酵じょごう節」「酵たね入れぬパンの祝い」のことが書いてある。この過越と酵たね入れぬパンの祝いを二つあい通じて一週間くらいやるわけだ。

●わが国はこの世のものならぬ

²⁹爰にピラト彼らの前に出でゆきて言う『この人に対して如何なる訴訟うったえをな

すか』³⁰答えて言う『もし悪をなしたる者ならずば汝わたに付きじ』

ピラトはかなり良識がある。

³¹ピラト言う『なんじら彼を引取り、おのが律法しつぽうに循したがいて審け』

ユダヤ法にしたがつて裁いたらいいだろうと。

ユダヤ人いう『我らに人を殺す權威なし』

本当はユダヤ教のあいだはできるんだけど、既にその頃はローマの治下にありますから、ユダヤ人は死刑執行はできない。これはローマ政府の官憲でなければできない。だから、こう言つて答えたわけです。

³²これイエス己が如何なる死にて死ぬるかを示して言い給ひし御言の成就せん為なり。

「成就せん為なり」という言い方はおもしろいけれども、「これによつて成就することになる」ということ。

³³爰にピラトまた官邸に入り、イエスを呼び出して言う『なんじはユダヤ人



の王なるか』

いよいよ質問が鋭くなってきた。

34 イエス答へ給う『これは汝おのれより言うか、

「今の質問は自分の立場で言うのか。汝はユダヤ人でないが、それをお前の立場で言うか」という。

將^{はた}わが事を人の汝に告げたるか』

お前の立場で言うとするれば——彼らにとつては靈界の王なんていうことは分からないんですから——即ち、いわゆる地上のカイザル、地上の最高の権威者という意味で、お前は「王であるか」と聞いているのか」というわけです。そうすると、

35 ピラト答う『我はユダヤ人ならんや、

私はユダヤ人ではない。だから、本当はそんなことはよく分からないと。

汝の国人・祭司長ら汝を我に付^{わたし}したり、汝なにを為ししぞ』

何だつてこのように渡してくるのか、正直に言ってもらいたい。自分はあまり関心がないわけだと。

ユダヤ人が「王」と思うときには、地上の最高の王だということ——また、彼らユダヤ人は今でも「メシヤ」というものを思っているんだから——地上に神の国を出現するところの王様、それがメシヤなんだ。「油注がれたる者」「メシヤ」はギリシア語では「キリスト」です。だから、ユダヤ人もキリストを間違っているし、ローマ人も間違っている。どちらも間違っているんです、本当は。だから、キリストは今度ははつきり言つた。

36 イエス答へ給う

「彼らは本当は私に躓いている。私は地上の王様になんかならうというわけではない」と。

『わが国はこの世のものならず、

「私の国はこの世のものではないよ」と。こここのところの言葉は非常に愉快な言葉ですね。このギリシア語からいうと、「この世からのものではない、この世から出たものではない」という。原因が、元がこの世にあるのではないと。

若し我が国この世のものならば、我が僕ら我をユダヤ人に付きじと戦いしならん。

「もしこの世からのものであるならば、ユダヤ人に渡さないように戦つたであらう」と。

然れど我が国は此の世よりのものならず』

ここはちゃんと「此の世よりのものならず」と書いてあるね。これは神からのものであり、神に属する靈界の王者なんだと。

37 爰にピラト言う『されば汝は王なるか』

「汝は王なるか」というのは、「お前は、それでは、お前の国の王か」ということ。

イエス答へ給う『われの王たることは汝の言えるごとし。』



「私は今説明したように霊界の王であることは、そういう意味においてはお前が言うとおりだ」と。

我は之がために生まれ、之がために世に來れり、
「私が來たのは、神の国を展開するために來たんだ」と。

●全存在で神に回帰せよ

それはキリストが最初に言われた。

「汝ら、悔い改めよ、神の国は近づけり」

と。神の国、神の支配する所が近づいたと。「悔い改めよ」というのは、これはただ悔い改めるのではない。

「回帰せよ。歸れ、立ち歸れ」

ということ。このことはさんざん『無の神学』(著作集第三卷)に書いてありますから。預言者たちもしょっちゅうそのことを言った。

「エホバに立ち返れ、神に歸れ」

と。ただ心で悔い改めるなんてことではない。

「全存在で神に立ち歸れ」

ということです。これが本当の意味です。「改心」「回心」でもまた足りない。もう今までの概念はみんなそこまできいてない。だから、私ははつきり、回帰と言った。そんなことをはつきり、「回帰」なんて言ったのが未だいないんだ。全存在で立ち返る。キリストはしゅよっちゅう神さまの中に立ち歸っている。

「神の国が近づけり。回帰して私を受けとれ」

と。「神の国が近づいた」というのは、

「私は神の国の、本当の実体だ。神の国の、私は本当の徴だ、活ける徴だぞ」

と。だから、「立ち歸れ」というのは、

「我に來よ」

ということ。もうキリストの懷の中に入ってしまったらダメなんだ。あなた方はお休みになるときに、

「主さま、私はあなたの懷の中に入って寝ますよ」

と。そうすれば、絶対に安眠できますから。起き上がるときには力が出てくる。朝起きて、あくびなんかしやしない。それは力がきて、ピンと跳ね起きてしまう。それくらいの気持ちで寝てくださいよ。グラッドストーンというあの大政治家はいろんなことがあったけれども、ひとたび床に入ると、彼は必ず安眠した。そのような気持ちでいたんだね、あのグラッドストーンというのは。グラッドストーンだのリンカーンだの、ああいうような魂の政治家が日本に欲しいよ。ビスマルクでもそうです。しょっちゅう聖書を読んでいた。ダメ



だね、全く日本は。それは教育がダメだから。魂の教育をしてないから。

塾でも何でもみんな学校に代わればいい。受験勉強も何もいらない。それぞれがみんな本当に魂の教育をして、それぞれ好きな科目をどんどん伸ばしてやる。人間は一生かかって本当は一つのことしかできないんです。それを中心にして回転していけばいい。だから、そういう望みを、抱負をかなえるような学校がたくさんあっていい。何人であろうが、制度がどうであろうと、そんなことはどうでもいいんだ。問題はそれだけの気合をもつてやっているかだ。吉田松陰の塾はそれの典型的なものです。素晴らしいものです。あれから出た数名の人たちが維新の大回転をした人たちじゃないですか。

それがこの「立ち帰る」ということ。そうすれば、魂も肉体もの凄い力に入っていく。それが福音という喜びの音信だ。キリストは七面倒くさいことを仰りはしない。我々が賜った才能、資質、性格、みんなこれを本当のプラスにしてしまう。変質変貌させてしまう。いわゆる禁欲主義ではない。キリストの言はいろいろあるから、ヘタすると躓くんだけども。

●真理を与えるために来た

今日は、この「真理とは何ぞや」というわけだ。

イエス答へ給う『われの王たることは汝の言えるごとし。我は之がために生まれ、之がために世に来れり、

「霊界の王者として霊界を、神の国を体現するためにやって来た。お説教しに来たのではないんだぞ」

と。「キリスト教」ではない。「教」の字はいらない。「キリスト」だ。

即ち真理につきて証せん為なり。

ギリシア語では、

「真理につきて」

と三格で書いてあるけれども、キリストは果たして、「について」と仰ったかはわからない。キリストはギリシア語で仰ったのではない。ヘブライ語だから。ヘブライ語に格なんかない。それで困るんです。ギリシア語はあまり言葉が多様性を持ちすぎる。豊かなんだ。ただし、ヘブライ語は非常に弾力性がある言葉です。こんな格なんかありはしない。これはヘブライ語で言うところ、

「真理を」

と書いてあるに違いない。「エメツ」という字はもともと「アーメン」という字からくる。「アーメン」というのは「然り」とか「然あれ」ということ。

ヘブライ語というのは漢文みたいに非常に弾力性がある。生きている言葉だから、その時の気合でつかまないと分からない。書かれたヘブライ語を訳すとなったら、解釈すると



なったら、いろんな訳が出てくる。旧約聖書の決定的な訳なんていうのは、この世の中が終るまでわからない。新約聖書だって本当はそうだ。だから、そんなことを詮索するよりも、その言葉の奥を、ヘブライ語の奥の神の根源語の響きを受けとるようにならなければ本当でない。音楽と同じなんだ、響きの世界です。

「真理を証するために来た」

という。「について」ではない。真理を証せんためにと。「エメツ」を体現せんため。「証^{あかし}」
というのは、自分が本当にそこに実存して、語り行ない体当たりする。とにかく、その存在そのものが静であろうと、動であろうと、全部その在り方自身が、生きざまそれ自身が、
「真理を生きざまでもって示さんがために来た」

ということ。これが一番よくわかる。本当は、示すばかりではないんだよ。その先は何と言ったらいいか。真理を与えるんです。与えるために来たよ。

「お前たちに本当の真理を与えるためにやって来た」

と。ここにシナ料理があつてき、シナ料理を示されただけで、お腹が満足するか。食べなくてはダメだ。

「真理を食べさせんために、真理を飲ませんために来たんだ」

と。私ははっきりそう言いたい。「につきて、証せんため」と、神学者が何のかんのと言う。

「バカ、何を抜かすか。キリストは自分自身を与えるために来たんじゃないか。真理とはキリスト自身だから。真理とは何ぞやなんて、神学論文を書いたつてダメだ」

と。どんな論文を書いたつてダメだ。「真理につきて」と言われるともう私はガツカリする。マルチン・ルターも『キリスト者の自由について』なんて、なぜ「について」なんて言うか。「キリストの自由」で結構だ。「について」説明する人はたくさんいます。一生懸命で参考書を読んだり、ギリシア語やヘブライ語を勉強したり。そして、「について」語ったり。大体がみんなそうだ、教会の牧師さんや無教会の先生も。「について」ものを言つていて魂が動くかと言ふんだ。「を」なんです。

「その世界を与えるければダメです。真理を与えるいで、何だ」

と。シナ料理は、「これこれから出来上がつて、その養分はこれで、カロリーはどうで、その構造はどうで」なんて、何を言っているかと。「食べろ」と言うんだ。「ああ、おいしい」なんてわけだ。そういう世界です。水は H_2O であることが分かつてどうなるか。飲まなければどうにもならない。福音というのはそういうものなんですよ。

だから、「キリスト教」なんていう「教」の字は嫌いだ。「教え」ではない。キリスト自身なんだ。そんなことを言うものだから、私はみんなに嫌われる。仕方がない。

「お前は我が名のために嫌われる」

とキリストは仰つたから。うれしいよ、嫌われれば嫌われるほど。嫌われることが恵みになる。だいぶ口が悪くなつたな(笑)。本当のその世界に入つたら、もう文句なしです。私



は涙が出そうだ。

どうしても、私は自分で新約聖書を訳さなければダメだね。文語体でもまだまどろっこしいところがある。

「いや、ギリシア語はこうじゃないか」

なんて言われたら、

「知らないよ、そんなことは。ギリシア語の奥を読んで、私は訳しているんだよ」

と言つてやる。そうすると、学者は誰も私を認めない。結構でございます。

「偽善なるかな、学者・パリサイ人よ」

とキリストは言つたではないかと言いたいわけだ。もうそうなったら、私はキリストと一つですからね、全世界を相手にできます(異言)。

●真理に属する者

凡て真理に属する者は我が声をきく』

ところが、「真理に属する者」なんか一人もない。キリストはこう仰っているけれども。

「今に属することになるぞ。それは私が十字架にかかつて、お前たちに聖霊を与え

たら、この真理の人になる。お前たち自身が真理の人になる」

と。もうはつきりしているんだ。これは「十字架・聖霊」です。

福音とは何ぞや。十字架・聖霊です。私はキリストと共に十字架されて、もう我執、我というものがなくなつてしまつてゐる。自分の状態がどうである、考えがどうである、健康状態がどうである、環境がどうである、暮しがどうである、学問がどうであるなんて、そんなことはどうだっていい。無我なんだ。無我者、無者。そうなると、聖霊という無限無量なものが来る。

「無即無限無量」という、私がNHKラジオで全国放送した「イエス・キリスト 無即無限無量者」の文章が載っている『エン・クリスト』12号(1982年12月号)、これはみんなに読んでもらいたい。増刷するから、あなた方はどんどん使ってください。もつと積極的に伝道してくださいよ。もう世は末ですからね、ボヤボヤしてられない。人にどう思われたっていいではないですか。

「お前たちは我が名のゆえに人に憎まれる。結構だ。それよりか先に私は憎まれてゐるんだ。しかし、これを本当に与えて、それにひっくり返される人は、そうだつと言つてとびついてくるから」

と。そういう世界ですから。もうたまらんです、私は本当に。

「我が声をきく」

というのは、

「お前たちは今まだ聞けども聞いていない。見れども見ていない。触れども触つて



「いないよ」

ということなんだ。キリストと一緒にペテロもヨハネもヤコブも、あの三人の弟子は一緒にいた。けれども結局、最後までダメ。ヨハネはかなりいいけれどもまだダメ。ペテロは躓いたり転んだり。

「けれども、受くべきバプテスマ、十字架を受けとって、それから祈って待っている。

聖霊が臨んでくるから。そうしたら、ガラリ変わるぞ」

と。これが使徒行伝の1章、2章です。それからペテロがすっかり変わってしまったって、エライことになった。ペテロもパウロも鮮やかな変化をしています。ヨハネというのはスーッと深くなっていく方だ。ペテロ、パウロ、ヨハネ、この三人が本当に福音を三色でもって証した。そのことは今度の『エン・クリスト』21号(黙示録の焦点(下))に書いてあるから。この21号は大事な号ですよ。もうこれ一冊で福音の世界が、また大希望が湧いてくる。それから、『エン・クリスト』のイザヤ書(6号(第三イザヤ)、11、13号(第二イザヤ)、17、18号(第一イザヤ))の5冊もひとつにまとめてしつかり持っていないさい。そして時々読んでください。イザヤ書とこの黙示録の上(19号)、中(20号)、下(21号)。どれもこれもみんな意味があつて大事だけれども。なにしろ、私は無駄なものをひとつも書いてませんから。いつもポケットにでも入れて、私の手紙、ラブレターだと思って読んでくださいよ。

●真理とは何ぞ

³⁸ピラト言う『真理とは何ぞ』

「アレテイヤ」という字は、「ア」というのは否定の字だから、「隠されたるものを顕すこと」。隠されたるものが露になるわけです。「誠」、この字が一番当たるんだ。言われたことは必ず成る。成らないものは真理ではない。キリストの言は必ず成るんです。これを誠まことという。いわゆる観念的な教えなんてものはひとつも誠ではない。観念的な真理性は持っていますよ。だけれども、ダメなんだ、そんなのは。生命を持ってない、力を持ってない。ヘブライ語でいうと、「アーメン」です。これが「真理」なんです。これはヘブライ語の名詞でいうと、「エメツ」という字はまた信仰の「信」にも当たる。「真」であり「信」でもある。それは必ず現ずるんです。本当は、真現なんだ。本当のことが現ずるのが真理で、現じないものは真理ではない。キリストは神の現象体です。この花は太陽の光の現象体。大自然は真理にあふれている。自然界には偽りがない。人間界は偽りだらけ。いわゆる飾つたりして。あるがままがいい。本当の美は、あるがままなところにあるんですよ。お化粧した美は、本当は美ではないんだ。女性は非常に化けるのがうまいけれども。あまり化けたらいかんですよ。御霊がくると内側から光を発するから、何かしらんけれども、生き生きとしてくる。そこに美がある。造花はどんなにきれいでもダメなんだよな、本当の花でない。本当の花は虫が食っていて



もいいんだ。

それで、ピラトが「真理は何ぞや」なんて言ったって、キリストはそんなことを説明なんか絶対になさらん。「我を視よ」ということなんだ、本当は。

「真理とは何ぞや」

「我を視よ」

と、キリストは仰るわけだ。ペテロもパウロも言いましたよ、「我を視よ」とは。何か求めてきた者に。エルサレムの東の方の美しい門で、生まれつきの跛者が、何かくれるかと思つて、ペテロを見ていたところが、

「私には金銀はない。わがうちにあるものを汝に与う。我を視よ」

と。「わがうちなるもの」とは何かと思つたら、

「イエス・キリストの御名によりて歩め」

と。これが「うちなるもの」だ。そしたら、生まれつきの跛者が立つてしまったではないですか。自分で驚いてしまったんだ。もううれしくてたまらなくて躍つてしまった。

だから、キリストという真理体です。真理体の中核がペテロの中に入った。中核とは何か。御霊のことです。聖霊です。ペンテコステでペテロの中に入った。そうしたら、ペテロの中にはキリストが生きてござる。御霊のキリストです。だから、キリストの御名において言えば、その言葉に力がある。そこで、跛者が立ち上がったしまった。

本当にそういうことの中に入つてごらん。自然にあなた方は誰でもできるはずだ。もう私もいろんなことでそれを体験していますから。

「小池先生はできるけれども、こつちはなかなかできない」

なんて、そんなことはない。「私の信仰は……」なんて言っているうちはダメだよ、自分の信仰を計算しているうちは。そんなものはゼロでいい。キリストの信、キリストの真理。これはさつきの「エメツ」です。ヘブライ語の方がよっぽどいい。ギリシア語の「アレテイヤ」でもいいよ。隠れたものが現れることだ。現れるもの。真現するもの。こんな言葉はないよ。ないけれども、そういう気持なんだ。人に与えることのできないものは真理ではない。ただお説教していたのでは。

●我なり

「真理とは何ぞや」

「我なり」

と言う。この前のところに「我なり」というのがあつたではないですか。18章6節。「我はそれなり」というのは、「それ」なんていう言葉はない。「エゴ・エイミ」といつて、「我なり」ということ。「私だよ」と言う。ゲッセマネの園で、

「イエスはどこにいるか、あいつを捕まえなければ」



「私だよ」

と言う。

「真理とは何ぞ」

キリストはもう一遍、「我なり」と仰るわけです。どんな大論文を書いたってダメです、この「我なり」は。「我なり」は、この「我」を受けとるまでは分からない。体受するまでは、体で受けとるまでは、この「我なり」は分からない。そうしたらもう、言葉は要らない。絶言の世界です。言を絶するところの世界。もう霊言、異言しか出てこない。「主さま！」と呼ぶときに、そういう実体に向かつて呼んでなければダメですよ。祈りのちよつと継ぎ目に「主さま」なんて言ったら冗談じゃない。あなた方、いい加減な祈りをしていたら、私は「止め！」と言うかもしれない。

「小池先生はおつかないから、祈れない」

なんて、そんなことはないよ。ちつともおつかなくない（笑）。愛すればこそ、私は嵐のようになつたりいろいろになる。全部、キリストの愛がかかっている。

まあ、私はこの頃くらい楽しいことはないね。今、人生で最高のところに来ているね、詩を書き出してから。見せたいけれども、見せない。12年見せない。まるで私はドンキホーテみたいだ。いいんだよ、それで。こういう集會に、何のかんと言つて来ない人がいるかと思うと、私は気の毒でしようがない。私は毎回前進しているんだから。もう距離ができてしまつて困るよ、あまり来ないでいると。

だから、

「真理とは何ぞや」

「我なり。キリストなり」

と、その他に言いようがない。それでは、もうひとつ言おうか。

「マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネのこの福音書の現実に入れ」

と。そうしたら、

「いわく言い難し。真理の何たるかが体で分かりました。からだで受け取りました」

と、それが言えるまではダメです。頭ではダメです。説明はいらない。答案はいらない。答案はその人自身。その人自身の生きざまが答案となる。はつきりそういう世界です。

私の神学は神学でありながら、超神学ですから。神学を乗り越えている。だから、キリスト教界で除け者にされるわけだ。もう私は組織神学会からは脱退しようかと思っている。ルッター研究会からもサヨナラだ。ゲートだけはやっている。楽しいから。もうみんないろんなものはお断りだ。本でも寄付してやるよ。

●キリストの世界に化身していく

皆さんも、本当の恋人がキリストになるまではダメだよ。



「天上天下キリストに代えるものはない」

と、詩篇73篇に書いてあるから。

「天にも地にもあなたの他に慕うべきものなし」

と。私の『詩篇』（著作集第四巻『詩篇珠玉集』1980年刊）の中にも書いてあるから。キリストを恋人にするような人となら結婚していいけれども、そうでなかったら考えものだ。詩篇73篇25節に、

「²⁵天上天下誰をか慕おう。ただあなただけ！ ²⁶わが身わが心は衰えるとも、

神は絶えずわが心の磐石、わが嗣業。」（私訳）

とある。ユダヤ人の信仰の世界はやっぱり凄いよな。

私という人間は不思議なやつでね、もうギリギリのところまで来ないとダメなんです。そこからこの力がグッともう楽に展開し始まる。だから、私は絶対界にいながら、絶対界の永遠の世界の呼吸をしているわけだ。だから、息苦しくならない。

「真理とは何ぞや」

と、先生は何を言うかと思ったら、何も言いやしない。キリストが

「我なり」

と言う。真理とはキリストだ。

「マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネをからだで読め。これは劇だから。劇の中に自分を投身せよ」

と。そうしたら、キリストの力が、知恵が——もう何でもいいよ——光が、愛が、義が、全部入ってくる。自分なんてものは問題でない。そうすると、霊的化学変化が起きてくる。化身する。キリストの世界に化身していく。からだが化していく。福音の中に化身していく。「どれくらい」なんて、そんなことは考えなくたっていい。キリストの生命がここに入ってくると、これがどんなマイナスであつても、こいつをやつつけていく。癌と違って、これは普通の癌よりかもっと凄いんだ、この霊癌は。キリストの御霊が霊癌なんだ。御霊という霊癌が入ったら、これが跋扈していきますからね。そして、普通の癌をやつつけてしま——こんな言葉は使わなくてもいいけれども——そうしたらもう文句なしです。

「御霊が来たら、お前たちは、私の言ったりしたことが全部分かるよ」

とキリストは言つてらっしゃるんだから。それで、ペテロやパウロもヨハネもみんなそうなつてしまった。御霊がすべてそれをなさしめる。

「分かる」と言つても、頭ではないですよ。身につけさせた。身につけていないものはみんなダメなんだ。真理を身につけること。真理は身につけなければ真理ではない。身につくもの。神さま、キリストが与えて身につくもの、これが真理です。そうすると、それはどうしても証せざるを得ない。証人になる。証者となる。証者とならなければ、真理は受けとつてないとはつきり言いたいね。キリストの真理です。「真理とは何ぞ」とは、それだ



け実存的なもの凄い内容および意味を持っている。

もう魂から魂に響いているでしょ、皆さん。まことに然りと。そうしたら、もう何を読んだって絶対に負けませんよ。キリストの光で見えてくるからね、全部。そしてそれを更に延長し、内容を深め、自由自在になつてくる。創造的になるんです、キリストと一緒に。クリエイティブになる。もうキリストの直弟子の次元に來なければウソだよ。今のキリスト教界は一般にダメだから。けれども、人間の魂はそういうものにぶつかるまでは、本当の喜びを持たないようにできているんだから仕方がない。半分喜んだような顔しているけれどもダメだよ、それでは。「もういいです」という世界に來なければ。

「何がどうなつたつていいです」

というところに来なければ。これだけ私が真剣勝負でやっているのに、集会に黙って何回も休んでいたら、「もう来るな」といつか言うかもしれない。楽しいでしょ。私の言葉は烈しいけれども。烈しいと楽しいは同じことです。

●召団讃歌A40 「キリストは地に在りて」

歌を作ったので紹介します。「キリストは地に在りて――キリストとペテロ」という題です。

A40 「キリストは地に在りて」

――キリストとペテロ――（1985・2・21作、作曲 市川リリ子）

1 キリストは地に在りて 枕なき旅の人よ！

キリストは罪の世に 神のみ業神の言

ハレルヤ ハレルヤ

あらわしませり 見よこの人！

誰か知らんこの真理を 身を提し來たりて見よ

2 主イエスはよみがえり テベリヤの湖辺近く

弟子どもに現れて「舟の右舷にあみを卸せ！」

ハレルヤ ハレルヤ

網に満ちたる大漁なりき

誰か知らん主キリストの 深き愛今も然り

3 「ああシモン愛するや」 「主よ然りわれは愛す」

主は三度問い給う 「主をば愛し聖名を讃う」

ハレルヤ ハレルヤ

「牧の羊を確かと飼えよ！

噫へテロ、我れと共に 十字架の道を往けよ！」

